

玩具

津村節子

文藝春秋新社

村節子

具

玩 具

著 者 © 津 村 節 子

発行者 上 林 吾 郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西 8-4

大日本印刷 矢島製本

1965年 9 月25日 発行

¥ 390

玩

具

	氷		白	
弦	中	軒	い	玩
月	花	忍	壺	具
211	139	89	53	5

装
幀

藤
城
清
治

玩

具

久しぶりに連れ立って出かけた縁日の人ごみの中で、志郎が金魚をかうと言ひ出したとき、春子は眉を顰めた。

春子は、小鳥とか金魚とかいう小動物を飼う趣味がない。というよりは、はつきりきらいと言つたほうがよかつた。

以前にも、志郎が買つて来た小鳥を、彼の旅行中に猫に狙われて死なせてしまったことがある。軒につるしておいた金属の籠がぬれ縁に落ちてゆがみ、底がはずれているのを目にしたとき、春子は思わず叫び声をあげた。一羽の十姉妹が籠と底との間にはさまれて死んでおり、もう一羽は猫がくわえ去つたのか姿は見えなかつた。周囲に夥しい雪片のような羽毛が散つていた。それが、小鳥の必死の抵抗を物語っているようで、春子は眩暈をおぼえた。

春子は白い膜のような目蓋を閉じて死んでいる小鳥に触れることができず、来合させた近所の少年に頼んでアパートの傍の空地に埋めてもらった。春子が嫌うのを承知で買つて来た志郎は、彼女の不注意をそうきつく咎めなかつたが、暫くの間不機嫌が直らなかつた。

その代り彼は、番の独楽鼠を買つて来た。春子は、小鳥が死んだことを内心ほつとしていたの

で、赤いペンキ塗りの小さな籠の中の独楽鼠を見たときには、これならまだ小鳥のほうがよくかったと思つた。小さな軀の割に体臭が強く、閉め切つた六畳間に鼠のにおいがいっぱいになった。春子は視力も聴力も人より敏感というほどではなかったが、どういうわけか嗅覚だけは鋭くて、妊娠してからは更にその傾向が強くなり自分でもあましていた。志郎は体臭が殆どないのだが、それでも悪阻の激しかった一時期は、傍に寄られるだけでも堪え難かった。

春子は小鳥を死なせたことで夫に負目があり、独楽鼠を買つて来たことに對していやな顔を見せることができなかった。志郎は、春子のそうした氣持を計算していたのかも知れない。鼠は、小さな赤い籠の中で根氣よく車を踏んで廻したり、砕いたピーナツ屑を前肢でつかんで食べたりしていた。横の物を縦にもしないという言葉そのままに不精で、傍の物を取るのにもいちいち春子呼びつける志郎であるのに、これらの生き物の世話は驚くほどまめであつた。雌の鼠が身籠ると、彼は益々熱心になつて、栄養をつけてやるのだと言ひ、生卵の黄味をとり分けて小皿に入れてやつたりした。鼠は細い前肢の指を皿の縁にかけて、大儀そうに黄身を吸つた。雌鼠の腹部がふつくりとふくらんできていて、それを見つめる志郎の眼に、春子は何故か羞恥をおぼえた。奇異なことに、春子はその頃妊娠五箇月目にはいつていたのに、軀は殆ど変化が現われていなかった。

ある朝、春子は、籠の底に敷いてある綿がすっかりかき寄せられて、鶏卵大の繭のようなものが形造られているのを発見した。雌鼠のほうは綿塊の外にうずくまつており、雌鼠の姿が見えなかった。ヘアピンをさし入れて綿をかきわけて見ると、その中央に雌鼠が腹這つており、その腹

の下から薄桃色の小指の先ほどのものが二つ三つのぞき見えた。なおも目をこらして見ると、それはピンセットの先でつまみ出したような耳と細い尾を持つ、小さな鼠の赤子だった。春子は自分でも驚くようなけたたましい声で志郎を呼んだ。彼は狂喜という言葉が決して大袈裟ではないほど喜んで、日曜日などは日がな一日鼠の籠をのぞき込んでいたが、春子は、つるりとした赤むけの肌に青い血管が透いて見える仔が気味悪くて、可愛らしいという気持などとても持てなかった。その雌鼠は、母性本能が欠如しているらしく、一向に仔を育てようとしなかった。乳を飲もうとする仔を邪慳に押しやったりする。志郎は氣をもんで、小皿に牛乳を入れて飲ませようとしたり、妻楊枝の先にすりつぶした飯粒をぬりつけて突き出してやったりしたが、生まれたての仔鼠たちはそれを食べることもできず、とうとうみんな死んでしまった。今度は自分の責任ではなかったが、春子は生き物に死なれるのがつくづくいやになって、それから絶対はこの種のを飼うことをやめて欲しいと志郎に幾度も念を押したのであった。

金魚屋の前に立ち停つて動かなくなつた志郎に、春子は当惑しきつていた。春子がしぶつてゐるのを感じとつてか、彼は艇でも動かぬように、金魚屋の平たいトタンを張つた水槽の前にしゃがみ込んでしまった。

「おじさん、そっちのキャリコはいくら」

などと言っているが、彼は蘭鐔が欲しいのだ。蘭鐔の稚魚は一匹百円であつたが、生餌をやらねばならず、水温の調節も厄介で素人には育てにくいものだということを、春子は聞きかじつて

いた。

「ねえ、目高が可愛いわ。目高なら丈夫だし」

春子は、目高なら妥協してもよい、と思う。金魚を飼うくらいなら、まだ小鳥や独楽鼠のほうが助かる気がする。春子は、金魚屋の水槽から立ちのぼる生臭さがやりきれなかったし、魚のくせに赤い色をしていて、鱗が光線の加減で虹色に光ったりすると胸が悪くなるのだ。蘭鐔の稚魚は墨色であるが、背びれがなくてのっぺらぼうなのはやはり気味が悪い。どうせ育ちはしないだろうが、もし色づいてきて獅子がしらとよばれる肉瘤が盛り上ってくるようになってきたらとても我慢ができないと思う。

「ばか、あれが値打ちなんだ。見事に盛り上ったかしらをした、肉付きのいい、尾の付根のしまったやつが、華麗な尾びれをしぼって泳いでばつと水中に開くさまは、えも言われねえ」

志郎は陶然とした眼差しになる。だがそう説明されても、頭部にふくれ上がった肉瘤は、皮膚に無数の腫物が吹き出ているのを見る無気味さで、美しさとは縁遠いものだった。素人の志郎が稚魚から育てることなどできる筈はないが、死なれても困る。赤い鱗も変に色褪せて、目を開いたまま、軀を傾けて水中に浮んでいる金魚の姿を想像するだけでも不快であった。死んだ魚をすくい出すことなど到底できないから、志郎の留守にそんなことになってもなったら、帰ってくるまで死んだ魚と狭いアパートの一室に同居していなければならぬ。

「目高なら、簡単に死なないと思うわ。生き物に死なれるのはいやなのよ」

春子は哀願するように言った。

「目高なんかつまらないじゃないか。そのまっ黒な出目金のやつ、可愛いな」

志郎は、魚の形態が人工的であればあるほどそこに美しさを感じるらしいが、春子にとっては畸型としか言いようのない不自然な形の魚には、嫌悪感しか抱くことができない。その気持の中には、身籠っている女としての本能的な恐怖が潜在しているのかも知れなかったが――。

「ランチュウは、生餌でないと駄目なの？」

とうとう志郎は、目的の蘭鰻に焦点をしばらくはじめた。

「ねえ、目高がいやならキャリコかなにかにしましょうよ」

春子は慌ててもう一步夫に歩み寄った。が、志郎はすでに春子の言葉など耳にはいらなくなっていた。

「ミジンコか赤虫がいいんだがね。生餌でなくても、いまは乾燥したやつがあるよ。水にもどせばいいんだ」

ビニールの袋にはいったものを一つまみ、金魚屋は傍の水槽の水を小さなアルミのボールにしゃくって、その中へ浸けた。ひじきのように干涸らびたものが、水に浸けられると徐々とけ、くっつき合っている一匹一匹がぬるりと離れて、赤虫にもどった。

「ふーん、便利なものができているんだな」

志郎はしきりと感心して、水にもどった赤虫を指先つまんで目を近づけて見ている。春子は、そんなものを平気でつまむ志郎に対しても嫌悪感を抱いた。赤虫をつまんだ指で触れられることは堪え難かった。そして自分の感覚が、妊娠によって異常になってきていることを、春子は今更

のように意識するのであった。

志郎は、自分の感情には極めて忠実であつた。言い換えれば我儘で、我慢ということができないたちなのだ。欲しいと思つたものは必ず手に入れる。春子への求婚の激しさを、彼女は志郎の愛情の強さのように錯覚していたが、それもやはり彼の我儘のせいだったのであらうか。

彼は、その時買えなくても決してあきらめることはしなかつた。不意に旅立ちを思い立つと、病氣のようにそのことばかりを思い、結局無理な算段をしても出かけて行つてしまふ。春子はそんな志郎を見ると、母親が、辛抱する、堪える、という躰をしなかつたために、こんな感情の抑制のきかぬ人間が出来上つてしまつたのか、とも思い、又、先天的に、脳のそうした感情の統制を司る部分に欠陥があるのではないか、と思つたりする。社会生活を続けてゆくためには、自分を殺したり、妥協したりすることも必要な筈なのに、志郎には、そんな自分自身に不誠実な生き方は考えられないのであらう。

志郎は、終戦直後の食糧事情の悪かつた時代に、受験勉強の無理がたたつて結核になつた。肺はもとより、腸まで病菌に侵され、体重九貫目にまで痩せ衰えた志郎は、医者にもすでに見放され、肉親たちさえ彼の恢復を信じる者はなくなつていた。当時の結核の療法としては、清浄な空気を呼吸し、栄養価の高い物を摂つて体力をつけることしか一般的には行われていなかった。志郎は、何を摂つても受けつけなくなつてしまつた自分の肉体が、日毎目に見えて衰弱してゆくのを眺めていて氣の狂うような焦慮に身を揉み、一か八かの手術を試みたいとせがむようになった。

その手術は、肺臓を保護している肋骨を数本切除することによって、胸壁で肺の病巣を圧し潰すという極めて原始的な原理の手術であった。その頃はまだ実験的段階にあり、手術台の上で多くの患者がモルモットのように死んでいった。殊に志郎のように腸まで菌に侵されて衰弱しきっている患者にとって、それを試みるということは無謀と言うより言いようのない危険率の高い手術であった。

だが、手術をしなければ、確実に死が訪れる。手術の成功は誰も保証できぬとはいえ、万が一にも生きる可能性があるほうを志郎は選んだのである。

数日間にわたって、軀中の血液が全部他人のものに入れかわるほどの輸血を受けた。そうして五時間五十分を費した大手術の結果、五本の骨とひきかえに志郎は命をとりとめたのだった。手術室へはいる時、死を覚悟していた志郎は、病床で恢復に向うにつれて、奇跡的に助かった自分の残された人生を思うように生きたいと、依怙地なくらい考えるようになっていた。

首すじから左脇腹にかけて弧を描く大きな傷痕を持ち、五本の肋骨を切って片肺を潰してしまつた志郎が、健康な人々と同様な社会生活を送る自信を喪失したのも当然であるが、小説を書くようになった動機は、そうした肉体的な条件よりも、一旦死の淵に臨んだことによって彼の人生観が變つてしまつたのだと春子は解釈していた。そうでなければ、あれほど世俗的な仕合せに背を向けられるものではないと思うのだ。金錢に対する執着はまるで無く、その日が暮せれば明日のことは考えず、社会的な立身出世などというものには全く無関心だつた。それよりも春子を哀しませるものは、家庭を単に寝る場所としか考えず、妻を女としか考えていないかのような態度

が見えることであつた。

学生の頃から放浪癖のあつた志郎は、アルバイトで臨時収入があると学校を休んでよく旅に出た。両親と死別して、弟とふたり兄の会社の社宅の一棟に起居していたが、彼らの行動を拘束する者は誰もいなかったから、何日も旅に出たり、友人の家を転々と泊り歩いたりして気儘に暮していたらしい。結婚して家庭に縛られるなどということは、精神的にも肉体的にも堪えられぬと考えていたようだった。

一流会社への就職を放棄していた志郎は、学生生活の殆どを文芸部の部室で過したが、結婚してから友人たちと季刊の同人雑誌をやっていた。勤めから帰った彼は、食事が済むとすぐ机に向つてしまう。春子は傍で編物などをして過している。だが、彼女がいると気が散つてかなわない、と無理なことを言う。一間しかないアパートでは、ほかに身の置きどころもなく、春子はせつなかつた。

声をかけることなどはもつてのほかであつた。志郎が自分の方へ向いてくれるのは、お茶をいれて一休みする時だけであつた。春子はその時間を楽しむためだけに、お茶菓子をかかさず買った。十二時を過ぎると夜食の準備をした。それも頃合いが難しいのである。筆がのっている時に声をかけようものなら、いきなり万年筆がとんできたりした。インクが飛び散つて衣服を汚されたり、畳にしみがついたりする。万年筆も当然いたむ。とりわけ万年筆にはうるさい彼が、これに懲りるかと思うと一向にそうではない。

春子は、癪癪を起すということがよくわからず、まして愛着のある物を壊されたときなど、あ